

氏名	小林 尚司 (学籍番号 11DN08)
学位の種類	博士 (看護学)
学位記番号	第 9 号
学位授与年月日	2016 年 3 月 8 日

論文題目 特別養護老人ホームに勤務する看護師に対する看取り看護の概念的理解を促進する研修の実施と効果の検討

論文審査担当者	委員長	木下 幸代	教授
	委員	山下 香枝子	教授
	委員	藤井 徹也	教授
	委員	森 一恵	教授
	委員	新宮 尚人	教授

論文要旨

I. 緒言

特別養護老人ホーム（以下、特養）の看取りでは、施設の看護師に中心的な役割を果たすことが期待されているが、看護師は特養の看取り看護の方針は未確立と感じており（流石，2007）、看取りに負担を感じている（後藤，2007）ことが報告されている。そこで、特養の看取りの普及のためにも、看護師が看取りに対する理解を深めることが必要と考え、その対策の一つとして、看護師に対する看取り看護研修を考案することを研究課題とした。本研究では、「看取り看護」を、看護師による、特養で看取りを行うために必要な、高齢者の状態のアセスメントや、高齢者および家族へのケア、特養の体制づくりなど、看取りの準備・実行・評価を含む活動とする。

II. 研究目的

特養に勤務する看護師を対象とする看取り看護の概念的理解を促進する研修を考案し、実際に適用してその効果を検討することを目的とする。

III. 予備研究

看取り看護の内容の実態を明らかにする目的で、8か所の特養で、看取りにおいてリーダー役割を担う看護師（各施設1名）を対象に面接調査を行った。その結果、看取り看護の《高齢者および家族への関わり》には、【高齢者と家族の意思の尊重】【アセスメントと予後予測】などの5カテゴリーがあり、具体的な援助内容は「維持期」「下降期」「臨死期」「振り返り期」の4つの時期区分に整理できた。そして、看取り看護では、維持期に『死を迎える場所と終末期医療の意思確認』することで、高齢者の意思の尊重が可能になり、『自分を看取ってほしいという願いに応える』という意識が生じるなど、長期間にわたって高齢者や家族と関わる過程が意味を持つことが明らかになった。そこで、看護師は、看取り看護を入所期間にわたる長期的で連続的な過程ととらえる必要があると考えた。

IV. 看取り看護の概念的理解を促進する研修の作成

1. 研修内容・方法 ①看取り看護の全体像、②看取りにおける看護師の役割と責務、について所要時間1時間の講義で説明した。また、講義後24週間を実践期間とし、12週と24週後に、看取り看護を振り返る機会を設けた。
2. 研修資料 「看取り看護の過程の時期区分」によって、「高齢者の心身の特徴」と「援助の概要」を整理し、さらに「看取りにおける看護師の役割と責務」を加えて一覧にした「特別養護老人ホームにおける看取り看護の概要図」を作成した。

V. 看取り看護の概念的理解を促進する研修の実施と効果の検討

1. 調査対象者 作成した研修を、看取りの体制が整備された4か所の特養で実施し、受講した19名の看護師を対象とした。
2. データ収集・分析方法 研修評価のため、次の3つのデータを収集した。①講義の評価：講義直後に理解しやすさなどを評価する質問紙調査を実施した。②研修後の看取り看護の変化：実践期間中の12週後と24週後に、看取り看護の振り返りの記載を得た。また、研修終了後に面接調査を行い、M-GTAの方法で分析した。③看取りに対する態度の変化：研修前後に、Frommeltのターミナルケア態度尺度で調査した。
3. 結果 研修の実施とデータ収集は、2013年7月から2014年4月の間に行った。
 - (1) データ数 講義の評価は19名から得た。研修後の看取り看護の変化と、看取りに対する態度の変化は、実践期間中に看取りの経験があった9名を分析対象とした。
 - (2) 講義の評価 「各期の時期区分」「各期の高齢者の心身の特徴」などの項目で、ほぼ全員が理解しやすく有益で活用できると答えた。自由記載には、【特養の看取りについて論理的に理解できた】などの理解、【過去の看取りに関する出来事について新たな視点で見直した】などの行動化があったことが示された。
 - (3) 研修後の看取り看護の変化 研修前は、看護師は、看取り看護を、臨死期の【死の看取り】と認識し、意味がわからないまま【根拠のない実践行動】を行い、看取することに【不安と煩わしさ】を感じていた。研修後は、看取り看護を【老衰死への過程における援助の体系】にとらえ、高齢者の【看取り過程の時期の判断】ができるようになり、【看取りに関するケアの根拠の明確化】【状況に照らしたケア方法の検討】【家族への働きかけの拡充】【チーム内のコミュニケーションの促進】などの論理的思考に基づく看護が実践できていた。またそのことによって、【看取りの意味づけの拡大】と【特養の看護師の役割の価値づけ】が深まり、【実践に対する動機づけ】を得ていた。しかし、看取りに対する態度は、研修前後で有意な差はなかった。

VI. 考察

看護師は、講義によって看取り看護の全体像を理解したことで、高齢者の状態を自然な衰退過程の一段階にとらえて、論理的に看護を展開することができるようになったと考える。看取り看護の全体像を理解する上では、看護を高齢者の衰退過程の時期区分によって整理し可視化した資料が有効であった。また、看取り看護の課題や目標が明確になったことで、看護師が看護を展開する能力を発揮できるようになったことが考えられた。本研究結果は、対象数が少なく、また態度尺度では有意な変化はとらえられなかったことから、一般化に限界があるため、さらに評価を重ねる必要がある。

VII. 結論

研修の後、看護師は、高齢者の将来の経過の予測とそれに基づいた看護実践ができるようになり、特養の看護の価値を感じていたことから、本研修の意義が確認できたと考える。

論文審査の結果の要旨

本研究は、特別養護老人ホーム（以下、特養）の看取りにおいて、中心的な役割を果たすことが期待される看護師を対象として、看取り看護の概念的理解を促進する研修を考案し、実際に適用してその効果を検討したものである。

最初に予備研究として、看取り看護の内容を明らかにする目的で、特養の看取りにおいてリーダー役割を担う看護師 8 名を対象に面接調査を行った。文献に示された看取り看護の 4 つの時期区分（維持期、下降期、臨死期、振り返り期）を参考にして援助内容を時期ごとに整理し、看取り看護を入所期間にわたる長期的で連続的な過程ととらえる必要があることを明らかにした。

予備研究の結果および文献検討を基に、看取り看護の概念的理解を促進する研修を実施し、研修を受けた看護師 19 名からは、講義によって看取り看護の全体像を構造的に理解できたとの評価が得られた。さらに、研修終了後 24 週の間に見取りを経験した 9 名の看護師は、実践を通して看取りの意味づけを拡大し、高齢者の状態を自然な衰退過程ととらえ論理的に見取り看護を展開することができるようになっていた。

本研究は、死を迎える場所として体制整備が急がれている特養における看取りのケア内容を構築し看取り看護を促進する研修を考案したものであり、現場での活用および研究の新たな展開が大いに期待される。本研修は特養での看取りを推進していく上で大きな貢献をするものと考えられる。

以上の結果から、審査委員会委員全員により、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認められた。